

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2013.03) 平成23年度:94.

入退院を繰り返す患者が主体的に療養行動を見いだすことができた要因の検討

古澤亜矢子

## 入退院を繰り返す患者が主体的に療養行動を見いだすことができた要因の検討

7階東ナースステーション 古澤亜矢子

### 【目的】

今回、入退院を繰り返した患者が自ら退院後の生活を考えることができた。その要因について検討し今後の療養支援のあり方について示唆を得る。

### 【方法】

事例研究。研究期間：2011年2月～3月。事例紹介：A氏60代女性、独居。2002年に2型糖尿病と診断されるが治療を中断。HbA1cが9%となり2007年より血糖コントロール目的で毎年入院する。分析方法：入院中の患者の言動と看護介入を抽出し自己効力理論の視点から要因を分析した。倫理的配慮：個人が特定されないよう配慮し研究以外に使用しないことを説明、同意を得た。

### 【結果】

これまでA氏は、入院することで体重減少や血糖値の改善を自覚しており食事療法の重要性は実感していたが「わかっているけどできない」と話し具体的な改善方法を見いだせずに退院していた。4回目の入院時も「どうしても間食はやめられない」と話しており、結果予期は高いが効力予期が低い状態であった。A氏はこれまでの指導的な介入に負担感を感じており、今回はカロリーやバランスに気をつけていること、入院中は間食せずに過ご

せていること、運動療法を取り入れたことなど実践できていることを伝え強化する介入を行った。その結果「今回は頑張れそう」「皆から運動を頑張っていることを褒められて嬉しかった」と話しており、退院後の生活に自信を持つことができ効力予期が高まった。さらに、食事や間食についての改善策を提案し共に考えた結果「間食の量や回数を減らす」「受診毎に栄養相談を受けて食事を見直す」と具体策を見いだすことができ「1ヶ月に1kg減量する」「まずはHbA1cを7%にしたい」など目標設定できた。

### 【考察】

これまでのA氏への介入は、食事療法ができないことに重点を置き、できるように指導する介入であった。しかし、この介入は本人が負担に感じており効力予期も低くさせていた。A氏のできている所に焦点を当て言葉で伝えたことで「自分にもできる」と自覚し療養行動への自信となった。また、頑張りを認められたことで意欲もみられ目標設定をするなど次の行動へと繋がった。これらの強みを引き出し強化する関わりが効力予期を高め主体的に療養行動を見いだすことができた要因と考える。